上杉文華館 目録
2026年11月26日（木）～12月20日（日）
西からの手紙⑨～織田信長の書状

	資料名	員数	法量　(㎝)	時代	作者	所蔵
複製	上杉本　洛中洛外図屏風	六曲一双	各160.4×365.2	原本　永禄8年（1565）	狩野永徳	上杉博物館
国宝	上杉家文書 織田信長書状	一通	17.3×49.8	（永禄7年・1564）11月7日		上杉博物館 文447
国宝	上杉家文書 織田信長書状	一通	16.3×39.8	（元亀2年・1571）3月20日		上杉博物館 文843
国宝	上杉家文書 足利義昭御内書	一通	19.4×50.5	（永禄12年・1569）2月8日		上杉博物館 文1689
国宝	上杉家文書 織田信長副状	一通	17.9×49.5	（永禄12年・1569）2月10日		上杉博物館 文448

2026年度の上杉文華館は「西からの手紙」と題して、国宝「上杉家文書」などを展示します。

書状は一定の規則に則って書かれました。このような規則を書札礼といい、差出人と受取人の関係が反映されていました。それをまとめた書札礼書も作られました。そこには差出者の社会的地位に応じた規範が示されています。その適用は厳密であり、ゆえに実際の書状の書き方から両者の関係を知ることもできます。

2023年度コレクション展および2025年度上杉文華館では戦国時代の上杉氏に主に東国の領主から送られた書状を、2025年度コレクション展では上杉謙信や景勝、その家臣らが発給した書状について、書札礼や使用された料紙などについて検討し、展示しました。

2026年度の上杉文華館では、戦国時代に京都やその周辺、中国地方など、越後より西の地域の大名や領主から長尾上杉氏に送られた書状を対象に、書札礼や使用された紙などについて検討し、展示していきます。東国の領主や上杉氏との相違なども意識しながら、その特徴などを明らかにしていきます。

第９回は、織田信長の書状をみていきます。

信長と上杉謙信は永禄６年（1563）ごろから友好関係にあり、元亀３年（1572）冬に同盟を結んで関係を強化しました。それは天正４年（1576）夏まで続きました。

この間の上杉氏への信長書状は、永禄７年から20通確認でき、宛名は謙信と直江景綱に大別されます。当初は本文の末尾に記す書止文言に「恐々敬白」というかなり厚礼な表現が用いられた景綱宛の書状があり、信長が上杉氏にかなり気を遣っていたことが窺えます。その後は、信長が景綱に対して上位の関係を示す書札礼に落ち着きました。一方で信長は謙信には終始、厚礼の書札礼で書状を出しています。幕府を主導し、それを滅ぼしても変化しませんでした。他の大名との外交の信長書状はこのような傾向があったことが指摘されています。

しかし、天正３年７月の謙信重臣村上国清宛信長書状の差出は花押ではなく、黒印が押され薄礼化しています（『諸州古文書』所収）。諸大名宛の信長書状の薄礼化も、このころに始まっており、信長が全国支配を具体化していくこととの関連が窺われます。ここに翌年の謙信と信長の断交に至るきざしをみることができるかもしれません。

「国宝上杉本洛中洛外図屏風」は、現状に基づいて制作した1993年制作の複製Ａを展示します。